

東京都奥多摩町におけるワサビ栽培

西村祐士

東京学芸大学環境教育実践施設

ワサビは生育環境に大きく依存しているため、機械化や農薬の使用も他の作物ほど進んでいない。その分栽培者自身の負担が大きくなり、手間と根気が要される。またワサビは数少ない日本原産の栽培植物の1つである。遙か奈良時代の文献にはすでに記載されていたことから、1,000年以上も長きに渡り日本の食に彩りを与えていたことが伺われる。

東京都西部に位置する奥多摩町は、奥多摩町は、東京都の最西端に位置し、西は山梨県、北は埼玉県と接している。面積は225.63k㎡であり、東京都の面積の9分の1を占めている。人口は7,299人（平成16年1月1日）が3,060世帯に居住している。標高300mの多摩川水面から2017mの雲取山頂上まで高度差が1700mもあり、様々な景観を擁している。

戦前は林業を中心として炭焼き、ワサビ栽培、コンニャク栽培、養蚕を例とした付加価値を付けたものを換金することで生計をたてていた。戦後の経済成長によって都市に人口が集中した結果、奥多摩町は都心に近いため、労働力の供給源として若年層が流出した。その結果在住する高齢者の比率が高まり、全国平均を大きく上回る水準に位置している。

奥多摩町においては200年前の江戸時代にワサビの栽培が始まった。かつては全国でも3番目の生産量を誇る一大産地であったが、ここ数年は市場価格の低迷、獣害、栽培農家の高齢化等の様々な要因により栽培量が減少していると言われていた。しかしワサビに関する資料、統計は存在しないに等しかったため、現状に関しては全く不明であった。そこで奥多摩町内のワサビ栽培農家20件と奥多摩町役場の担当係に対して、2004年11月から2005年1月にかけて、調査票を用いた直接聞き取りを行った。

調査した栽培農家の平均年齢は70.9歳であった。半数以上の栽培農家がワサビ栽培に100年以上もの歴史を持っていた。80%もの農家が先祖からワサビ栽培を引き継いで継続しており、自発的

に栽培を始めた農家は全体の20%に過ぎなかった。60%の栽培農家は、跡取りが奥多摩町外で職に就いているため同居していなかった。結果を元に各農家の栽培本数の平均は20,085本となった。また、各農家の栽培面積の平均は1,312㎡（約1反3畝）となった。平均本数と平均面積から1坪当たりの植え付け本数が50.5本/坪となった。専業栽培で生活を送るために必要だと言われている50,000本を超える栽培農家は15%しかいなかった。ほとんどの農家で実生苗を使用していた。1本30円未満であり、ほとんどの農家は伊豆の実生苗栽培者に注文していた。丈夫に育ち、成長も早く、収量も安定しているため好んで使用されることが分かった。4月から6月に植え付け、翌年の10月から12月に収穫するまでの18~20カ月間栽培されていた。基本的に相場の高い12月に収穫する農家が多かった。売り先は中央卸売市場に出荷する農家の割合が多かった。組合は2つのワサビ専門仲買業者と提携していた。駅前などの店の店頭に出荷する人もいた。スーパー、デパート等と直接取引する農家もいた。漬け物加工を手がける専業農家は、顧客の大量注文に応えるために町内の栽培農家から購入していた。売値は品種、品質、季節により差があるが、奥多摩産は一般的には3,000~4,000円/kgで取引されていた。奥多摩町の栽培農家が現在一番頭を悩まされているのが獣害である。栽培農家が挙げた動物は多い順に左からシカ、イノシシ、サル、カモシカ、ウサギである。「マモノ」、「ケダモノ」と呼ばれるほど栽培農家と野生動物間の溝は深かった。動物が増えた原因として、約20年前からのシカの狩猟禁止が挙げられた。ワサビは自然環境の影響を敏感に受ける植物である。また、多くの栽培農家が環境、特に水量の変化を感じていた。水量が減少した沢もあれば、枯れてしまった沢も存在するということが分かった。山中でも保水効果の大きい落ち葉が減少したと聞いた。時間をかけて融解する積雪は地面にとって保水効果が大きくなるが、その雪の量も減少したと聞いた。また、野生動物

が植生を全部食べてしまうために斜面が荒れた結果、谷も荒れ、水質に影響を及ぼすことが分かった。現在ワサビの価格は相対的に下がってきていることが分かった。10～15年前は高値を維持していたが、それ以降現在は当時の半値になってしまった農家が多かった。外的要因としては主に全国的な栽培、安い輸入物の流入、不景気による高級料亭の衰退、日本人の食生活が変化、が挙げられ、内的要因として品質面における奥多摩産のブランドの低下が挙げられた。20～30年前は町内で8haものワサビ田が利用されていたが、現在では4haに減少したことが聞き取りで分かった。調査の最中に聞くことができた全盛期を懐古する言葉からも、多くの栽培農家が悲観的な認識を共有していると考えられた。しかしながらワサビ栽培に意欲的な農家も数件存在した。ワサビ栽培を趣味として毎日のように山に入る栽培農家も多数存在し、

健康維持のために栽培をしている人もいた。奥多摩山菜栽培組合としても、「体験型ワサビ農園」を2005年度春から具体的に行う予定で計画を立てていることが分かった。奥多摩町にとってワサビは、町の農業生産額の6割を占めるなど地域の特産物として重要であるため、行政で栽培の支援を行っていた。ワサビ田への到達度改善のためのモノレール整備事業や、獣害防止ネットに関しては東京都と共に資金補助を与えていた。獣害を減少させる目的で平成15年度より捕獲が開始された。今後はニホンジカ特定鳥獣保護管理計画の策定により、頭数管理が行われる計画がある。また、後継者の育成を目的とした「奥多摩わさび塾」への資金補助も行っていた。資金補助は計画上では2005年度で終了するものの、部分的には補助を継続する方向であることが分かった。

表1 栽培農家の現況

No.	年齢	性別	就業形態	自家栽培の歴史	組合	後継者の存在
1	昭和一桁	男	趣味	親父はやっていた	×	いない
2	71	男	専業	自分で始めた	○	いる
3	74	男	兼業	退職してから	○	今はいない
4	76	女	兼業	3代目	○	今はいない
5	74	男	兼業	3代目	○	いない
6	72	男	趣味	自分は50年前から	○	今はいない
7	79	男	兼業	江戸時代	○	退職後するかも
8	73	男	兼業	ずっと先祖	○	いない
9	81	男	兼業	昔から	○	やらないだろう
10	81	男	兼業	4代目	○	不明
11	65	女	兼業	退職後7年前から	○	いない
12	45	男	専業	50、60年前	○	子に継がせる
13	79	男	兼業	退職後15年前から	○	別にいない
14	57	男	趣味	親父が50年前	○	分からない
15	72	男	兼業	先祖から	○	息子はやらない
16	76	男	専業	100年前から	○	やらなさそう
17	71	男	専業	3代目	○	やればできる
18	80	男	兼業	3代目	×	分からない
19	73	男	兼業	4代目	○	いない
20	47	男	兼業	5代以上	○	安泰

奥多摩町におけるワサビ栽培は、面積、栽培本数からも小規模であり、大きな収入は見込めない状況であった。兼業農家の大半は収穫したものを卸売市場に出荷するため、市場価格低迷のあおりを受けている状態だった。収入を平均栽培本数に基づき概算すると900,000円以下となった。苦勞

して栽培しても労力に見合う採算が合わないことに加え、野生動物による被害が激増するなど、ここ10～15年で栽培環境が急速に悪化したと考えられる。不定期に発生する水害によりワサビ田が壊滅することもあり、不安定な状態の中で栽培を継続している。収入の少なさ、重労働、収量の不

安定という3点が栽培意欲の低下、さらには後継者不足の要因と考えられる。しかし近年の状況や「観光ワサビ農園」の動きから、退職後の余暇の時間にワサビ栽培をする新規栽培者が増える傾向が予想される。職場で得た知識や経験を宣伝や流通の面に持ち込めば、奥多摩町のワサビ栽培は「ブランド」として活性化する可能性もある。ただしワサビの収穫には基本的に2年を要するが、良いワサビを収穫するためにワサビ田を10年以上改

良することは定説である。そこで熟練ワサビ栽培者から指導を受けることが可能なシステムを作ること、栽培技術の底上げを図ることが可能だと考える。行政の補助のあり方も、モノレール等のハード面から、伝統技術の継承等のソフト面に対して補助支援を向ける必要に迫られるだろう。栽培技術の底上げを図ることが、今後の奥多摩ワサビのブランド保持に寄与すると考えられる。

表2 ワサビ田の現況

No.	ワサビ田へのアクセス	ワサビ田へ行く頻度	ワサビ田の面積	栽培本数
1	借家の近くの川の隣	気が向いたら	少し	少し
2	全部で4カ所	週一日はどこも見回る	全部で5～6反	約80000本
3	車で15分	暇があれば毎日でも	3反	約45000本
4	2時間歩いて行く	月に2度くらい行く	2畝	4000本
5	全部で30分	月10でも20でも	4畝	12000本
6	車で10分ぐらい	今は月に1回ぐらい	1反	10000本
7	家の近くに2カ所	年間100日は行った	60坪	2000本
8	全部で25分	週に2,3回	約5畝	10000本
9	徒歩30～60分	10日に1回は行く	5畝	15000本
10	バイクで行く	週5日	1.5反	30000本
11	車で5分	仕事の合間に行く	110坪	5500本
12	町のあっちこっち	ほぼ毎日	4反	50000本
13	車で10分	時間ができたら	3畝	3000本
14	歩いて10～15分	月に2回	30坪	2000本
15	家から10km	暇があればいつでも	1反5畝	4000本
16	5kmぐらい	天気の良い日はほとんど	2反ないぐらい	30000本
17	大丹波、青梅 等	毎週全部1回以上行く	1反以上	25000本
18	真名井沢	今では週1日	10坪	600本
19	近くの山	月に1回	計45坪	3000本
20	家のまわり	誰かしらほぼ毎日見に行く	約4反	約70000本